

ハンセン病と無知からの差別

山南中学校 1年 若林 ゆるる

私は夏休みの間、人権教育事業「よつば学級」に参加していました。そして、人権とは何かについて考えたり、実際に水平社博物館に行き人権の尊重をめざし生涯をささげた人々の歴史を学んだりしました。その中でも特に心に残っているのは、ライフピアいちじまでの講演で田村朋久先生が話された「ハンセン病」についてのことです。

その講演では、ハンセン病は別名らい病と呼ばれらい菌によって感染すること。皮膚（斑紋・結節・脱毛など）や末梢神経（運動神経・知覚神経・自律神経のマヒ）に病状がでること。しかし、ハンセン病の感染はまれ（衛生状態が相当悪くない限りかからない）で感染したとしても発病するのもまれなこと。これ以上感染者を増やすまいという策により断種や堕胎がおこなわれており、もし生んだとしても赤ちゃんは殺されてホルマリンづけにされていたこと。大風子油やスルフォン剤や多剤併用療法などの薬があり、ハンセン病はプロミンという薬によって治せるようになったことなどを学びました。

そしてその講演を聴いて、「本人や家族の目の前で家の中の物全てに消毒をするのは、全てを病原・汚物ととらえているようであまりにもひどい」「家族にまで差別の目が及ぶのは違う」など沢山の考えが浮かびました。その中でも特に深く考えたことが三つあります。

一つ目。ハンセン病は「天刑病」や「仏罰」「遺伝病」とも言われる程、手足がくさる、変形するなど「見た目」が大きく変化しました。そして無らい県運動（千九百三十一年）によって「ハンセン病は強い感染力を持つ」という誤解へとつながり、人々は恐怖に襲われたのです。そしてその「怖さ」こそが、ハンセン病感染者への「偏見」「差別」へと変わっていったのではないのでしょうか。

二つ目。ハンセン病にかかると、自治体の職員に家中を真っ白になるまで消毒され、銭湯に行っても入浴を断られ学校ではいじめられるようになり、周囲からは白い目で見られるようになりました。そして施設への入居を余儀なくされたのです。施設では偽名（俗名）をなのり、見た目や感染したという事実だけで囚人のように扱われるようになりました。それと同時に社会と断絶され、家族とは離れ離れになるどころか縁を切られる人もいました。周りからの差別はもちろん、家族にまでそれが及んでしまっているという罪悪感から、生きる気力を失った人も多いと思います。施設を退出し

たとしても、続いている差別、家族と縁を切られているため施設に仕方なくもどり、亡くなっても自分のふるさとのお墓に帰れない人も大勢いました。今でも、後遺症による入所者は九十五名（男性五十名女性四十五名）もいて、入所者の平均は八十八さいをこえています。いくら後遺症が残っていても病気自体は治っているのだから、もっと社会にうけいれるべきだと考えました。

三つ目。無知こそが差別の芽です。先程も述べたとおり、ハンセン病がどんな病気かが「わからない」怖さが偏見や差別につながっていきます。それにハンセン病だけに限らず誤った情報が沢山あります。だからこそ、全ての情報をうのみにせず、沢山の情報の中から正しい情報を自分で判断することが大切だと思います。そして、正しい情報を自分で判断したら、それで終わってしまうのではなく周り（誤った情報にまどわされそうになっている人）に正しい知識を伝えていきたいです。それに、講演者の田村朋久先生のおっしゃっていたように、「間違った情報に流されずに、正しい理解をもち、人権感覚に基づいて行動」をしていきます。

これら三つが、私がこのよつば学級で学んだ感想です。

最後に、私はハンセン病の存在を知っていました。隔離政策が行われていたこともうっすらですが知っていました。しかし、知りませんでした。いや、知ろうとしませんでした。隔離政策がどのような実態なのか、誰がどれだけ苦しい思いをしていたのか。だからこそ“知る”それが差別をなくす一番の近道ではないでしょうか。そう、何度も言うようですが「無知が差別を生む」ということは「知っていれば差別は生まれない」この言葉を胸にきざんで生きていくことをちかいたいと思います。そして、幸せの象徴であるよつばのように、人々の幸せをみつけ、幸せ＝人権を大切にしようと考えた「よつば学級」この名前の由来のように、周りの人そして自分の人権を大切にします。